

## P1-024

## 「他児の治療見学」を組み込んだプレパレーションの効果～幼児期後期の児に対して行った放射線治療支援の事例～

菅藤 七海、細澤 麻里子、八田 京子、  
及川 奈央、岩崎 友弘、吉川 尚美、清水 俊明

順天堂大学医学部附属順天堂医院 小児科・思春期科

## 【背景・目的】

放射線治療は痛みを伴わないものの絶対安静を要し、また恐怖心から、幼児は鎮静を必要とする事例が多い。一方で鎮静剤の使用には、薬物投与のリスクと共に、絶飲食や安静による生活リズムへの影響が伴う。そのため可能な児においては覚醒下で放射線治療を行うことが望ましい。今回、新規医療処置への不安が強い5歳児に対し、「他児の治療見学」を組み込んだプレパレーションを行い、児が自信をもって覚醒下で放射線治療を行えた一例を経験したので、その効果と課題について報告する。

## 【方法】

診療録から、一事例について後方視的に振り返りを行い、検討を行った。

## 【結果】

男児Aは嘔吐を主訴に5歳2ヶ月頃より近医を受診していたが、5歳6ヶ月時に入院し約1週間後の手術にて髄芽腫と診断された。新規の医療処置に際し興奮して暴れる姿が散見されたため、1ヶ月半の放射線治療を前に、担当医からの依頼で介入を開始した。遊びでは知的発達に年齢相応と推察され、自発的に行動したり他児との交流を好んだりする姿が見られた。加えて、痛みを伴わなければ、経験のある医療処置には落ち着いて臨むことができていた。そのため放射線治療をより具体的にイメージし対処できるよう、男児B(4歳)の治療見学を組み込んだプレパレーションを行った。当日、男児Aは遊びの延長でリニアック室を訪れ、初対面の男児Bと交流した後、覚醒下での放射線治療を見学した。見学後「Aも白いお面です」と発言があり、初回の治療は自分で用意したCDを聞きながら覚醒下で行うことができた。その後も、鎮静剤の使用は1回に留まり、以外は覚醒下にて治療を実施することができた。

## 【考察】

男児Aは新規の医療処置に対して強い恐怖心をもっていと考えられた。一方で自己への有能感と社交的な性格を有しており、これらを考慮した方法を用いたことで不安が軽減し、かつ初回の治療へ落ち着いて対処でき、覚醒下で遂行することができたと考えられた。一方で、今回は他児とその家族の協力を得られたが、プライバシーの問題もあり、見学が難しい場合も予想される。また、見学される児の精神状態や医療の経験値の見極めも重要であり、この判断を誤ると、見学される児の緊張及び対象児の不安を増強させ得る。効果的に支援を行うためには、対象児だけでなく見学される児とその家族を含めたアセスメントや関係作りを日頃から丁寧に行うことも重要となると考えられる。

## P1-025

## プレパレーションを実践するために必要なアセスメント能力について－病院に勤務している看護師へのインタビュー調査から－

甲斐 寿美子<sup>1</sup>、光楽 香織<sup>2</sup><sup>1</sup>東京医療学院大学保健医療学部 看護学科<sup>2</sup>東都医療大学ヒューマンケア学部 看護学科

## 1. 【目的】

病院に勤務している看護師がプレパレーションを実践するにあたり、どのようなアセスメントをしているかその実態を調査し、その結果から看護師がプレパレーションを実施するために必要なアセスメント能力について考察する。

## 2. 【方法】

研究デザイン：質的記述的研究法を用いた。調査方法：10例以上の患児にプレパレーションを実施した経験を有する看護師6名に、40分から1時間の半構造化面接を実施した。本研究は研究代表者所属の倫理審査委員会の承認を受け、6名には文書と口頭で研究の概要および倫理的配慮について説明し同意が得られた。調査期間：2016年7月～2017年6月調査内容：面接の内容は、プレパレーションの4段階、子どもと子どもを取り巻く状況、プレパレーションの実施、ディストラクション、子どもと処置後のストレス緩和、および実施後の評価について、どのようにしているかである。分析方法：インタビュー調査の逐語録を作成し、まずすべての内容を意味単位で切片化し、看護師のアセスメントに関わると考えられる内容を抽出しコード化した。次にそのアセスメントがどのような状況について、あるいはどのような状況において実施されているか、その共通性と類似性から統合してサブカテゴリー化を行った。さらにサブカテゴリーの共通性から抽象度を上げ、プレパレーションを実施する際に必要とされるアセスメント能力としてカテゴリー化した。

## 3. 【結果】

抽出したコードの内容から看護師のアセスメント能力として、22のサブカテゴリーと5つのカテゴリー、実施前の情報収集、患児のアセスメント、実施中の状況判断、アセスメントに影響を与えている看護師の考え方、実施後のアセスメントが抽出された。

## 4. 【考察】

看護師はプレパレーションのどの段階においても母親の立場を重視し、母親の考え方や母親が捉える患児の状況、母親自身の反応などをアセスメントしていた。患児をアセスメントするために母親のアセスメントをすることが重要と考えている実態が明らかになった。実施中は特に、患児の拒否反応やトラウマ的体験についてアセスメントしており、悪影響が最小限になるように配慮していると考えられた。また実施後の評価については、評価が難しいと考えながらも、患児の反応、看護師間の情報交換やカンファレンス、他職種との情報交換などによって、評価しようと努力していた。